

太田美幸 著

## 『生涯学習社会のポリティクス

—スウェーデン成人教育の歴史と構造—』

新評論 2011年 21.4×15.6×3.6cm 380頁 ¥3990(税込)

### 本所 恵

人びとの思想と日々の生活が、教育をつくり、社会をつくっていく。そんなメッセージを、本書は確信をもって手渡してくれる。

著者は、国際比較や学習機会の豊かさのみ注目してスウェーデンを「学習社会」とする見方への違和感を提起し、スウェーデンを代表する思想家であるエレン・ケイが言及する「民衆教育」と現在の生涯学習論との異質性を指摘する。それは、国家による公教育と民衆によるノンフォーマル教育とのあいだに目を向け、そこに何らかの確執を見ることといえる。両者が協力関係をもって共存しているように見える現在のスウェーデンの状況を鑑みれば、そこに著者が冒頭で提示するラディカル成人教育の視点を持ち込むことは、少なからず動揺を生む。この驚きを本書は、重厚な事実と人びとの生きた歴史の記述の中で紐解いていくのである。

その歴史は、大きく三つの段階を踏んで記述される。第一には、広く民衆を対象とする教育が生じた前提として、19世紀までの社会状況と教育のありようが確認される。工業化の進展とともに都市部で労働問題が拡大し、その克服をめざして民衆運動が展開した。重要なのは、その運動が資本への攻撃よりもむしろ、労働者に「教養」を与え、新たな社会秩序の形成をめざした点である。

鍵になるのはこの「教養」である。労働者たちの「教養」は、旧来の教養理念とは大きく異なっていた。労働者の教養を高めるために、自由主義者たちは講義中心の伝達モデルを示したが、これに対して社会民主主義の民衆運動では「自己教育」の思想を土台に、学習サークルによる、労働者の生活に即した学習が推進された。読書によって各人がそれぞれのベースで知識や経験の幅を拡げ、思考を深め、社会的現実を知るとともに、そ

れを変革する可能性を認識することをめざしたのである。その学習は、支配的文化を批判的に受容しながら、労働者自身の生活に合わせて教養をつくり変えるものだったといえる。このように民衆教育が社会の民主化を求める運動とつながって組織化される過程が第二段階として描かれる。

第三は、20世紀に普通選挙権が実現されたのち、民衆運動が穏健化し、教育を通じた闘争が不要になって以後の民衆教育に関する記述である。民衆教育は消滅せずに運動から独立して維持され、失業対策への有効性や多文化化への対応策として期待された。20世紀後半には、公的な成人教育機関が設置され、公と民の機能のすみわけが問題になった。現在、前者が職業資格に結びつく学校教育を、後者が学習サークルを通じた人格的教育を中心に担いつつ、重なりをもって共存している。国家プロジェクトとして実施されるようになった成人教育においては、もともとの、主流文化からはみ出た存在である民衆の運動としての性格は影をひそめた。だがその性格がなくなったわけではない。著者は、環境運動、女性運動、移民の運動の実際を事例に、社会変革をめざす運動と結びついた民衆教育が存在することを示している。

このようにスウェーデンの学習社会は、公権力による教育制度の再編成によって実現されたのではなく、国民教育制度からはみ出した人びとによるノンフォーマルな教育活動が広がり、定着し、それが前提となって整備された。その歴史は、戦後スウェーデンの社会民主党による国家主導プロジェクトとその成果に目を奪われがちなわれわれの見方に再考を迫る。

また、本書が再考を迫るのはそれだけではない。随所にみられる、民衆教育を進めようとする思想が生む言葉は力強い。その力強さは、教育を個人レベルではなく、社会全体の発展のために希求するゆえのものだろう。自らの国の教育を、そして自分自身の教育を見直したときに、われわれは、そのような強さを見出すことができるだろうか。学校教育を含めて、今日の教育という営みの根本を、そしてそれを社会のなかで行うことの意義を、再考することが求められよう。